

平成21年6月8日現在

研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2007～2008年
 課題番号：19520719
 研究課題名（和文） オセアニア小島嶼における資源利用と居住システムの解明
 研究課題名（英文） A Study of the Resource Utilization and Habitation Strategies of the Inhabitants of Small Coral Islands in Oceania
 研究代表者
 印東 道子（INTOH MICHIKO）
 国立民族学博物館・民族社会研究部・教授
 研究者番号：40203418

研究成果の概要：ミクロネシアのファイス島から出土した交易土器が、時代によって異なる地域で生産されたものかどうかを検討するため、ファイス島出土土器およびヤップ島とパラオ島の粘土試料に含まれる鉍物分析を行った。その結果、ヤップ島の粘土鉍物組成は類似しており、ヤップ島で生産された土器を更に村単位で生産地を復原するのは難しいことがわかった。他方、ヤップ島とパラオ島の粘土鉍物組成は互いに異なるので、この2島で作られた土器は鉍物組成鑑定を用いることで区別が可能であることが確認された。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,700,000	810,000	3,510,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：オセアニアの考古学、文化史研究

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学

キーワード：ミクロネシア、サンゴ島、居住史、交易、土器、堆積

1. 研究開始当初の背景

本研究は、資源に乏しいサンゴ小島嶼への人類居住と環境適応の変化の様相を明らかにするために行ってきた一連の研究の一部として行う。過去3回の発掘調査を行ってきたミクロネシア連邦、ヤップ州、ファイス島からは、土器片を1000片以上発掘から入手している。サンゴ島であるファイス島には粘土がないため、これらの土器はファイス島で作成された可能性はきわめて低い。おそらくファイス島近隣の粘土のある火山島で作られ、ファイス島に交易などで持ち運ばれてきたものであることが予想された。土器の表面

や断面、および粘土胎土の観察に基づく分析では、ほとんどが西方のヤップ島で作られた土器であることが予想され、専門家に依頼した鉍物鑑定結果でも、ヤップ産の土器であることが裏付けられていた。

2. 研究の目的

ヤップ島は歴史時代に至るまで、ファイス島との交易関係を持っていたことで知られている。交易はヤップの限られた地域の村が独占して行ってきたことが民族誌資料から知られている。果たしてそれが交易の歴史を通じて常にそうであったのか、あるいは、歴

史的に特定化された結果であるのか、ファイス島から出土する土器片を分析することで、交易相手地域、あるいは村落の変化の様子を明らかにしてゆく。それによって、このようなサンゴ島に居住しながら、その生存戦略の一つとして継続してきた交易形態の歴史を復元し、多数地域との交易から次第に一地点との交易へと収斂した可能性、およびその背景理由を検討する。さらに、歴史的に交易相手とされてきたヤップ島以外の島、具体的にはパラオやマリアナ諸島との交易も行っていかどうかも検討し、サンゴ島居住者の居住戦略を復元することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) ファイス島出土の土器の交易相手の時期的変化を復元するには、細かな年代測定値による時代区分が必要である。そのため、新たに11点の年代測定を行った。

(2) ファイス島で2005年に行った発掘調査で出土した土器の鉍物分析を追加試料として行った。

(3) 土器の他にも、サンゴ島には存在しない石が出土しているため、それらの鉍物分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託して行った。

(4) パラオで採取してきた伝統的な土器作り村で利用していた粘土サンプル（ガッパン村、ゲルミド村）の薄片による鉍物鑑定、粘土鉍物分析、および蛍光X線分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託して行った。

4. 研究成果

(1) 年代測定値と土器や他の遺物などの出土状況から、ファイス島の先史時代を以下のような4つの文化期に分けられることを提唱した。

第1期：AD1-400

第2期：AD400-800

第3期：AD800-1400

第4期：AD1400-歴史時代

(2) 2005年度の発掘調査から出土した土器は上記全ての時期から総計504点出土しており、ファイス島住民が火山島から継続的に土器を輸入していたことが確認された。

(3) 大多数の土器はヤップ島産で、時期的に、ヤップにおける土器変化と同様な変化がファイスでも確認された。

第1期：CST土器と無紋土器

第2期：CST土器と無紋土器

第3期：層状土器

第4期：層状土器

(4) ヤップの特徴的な3種類の土器の形式分類に合致しない土器片が、第3期から14点、第4期から2点出土しており、第1および第2期からは出土していないことがわかった。このことは、ファイス島住民が、居住開始後800年間は、ヤップ以外の火山島との接触をもち、そこで作られた土器を持ち帰っていたことを示している。これらの土器の特徴は、断面が非常に黒く、石英粒が混入し、堅いというものがあげられる。これは、ヤップの南に位置するパラオ島で作られていた土器の特徴に合致し、鉍物鑑定の結果もパラオで作られた可能性を示している。

このことは、ファイス島民が、移住後800年間はヤップおよびパラオと文化接触を持ち、土器などを輸入していたが、紀元後800年以降はもっぱらヤップ島との交流に限定されたことを示している。ただし、パラオの土器が全体に占める割合は約4%にすぎず、定期的な交流よりもむしろ偶発的交流の可能性も考えられる。

(5) ヤップ島最古のCST土器（今から約2000年前〜と、やや後に位置づけられる無紋土器がファイスでは同時期に発掘され、量的にも同程度が出土することから、ここで無紋土器と分類したものにはヤップ島以外で生産されたものが含まれている可能性がある。その産地がどこであるかを同定するには、今回行った薄片分析による鉍物鑑定よりも簡単かつ大量に分析できる方法を開発する必要があるであろう。

(6) 出土した岩石7点の薄片による鉍物鑑定の結果、5点は変成岩で、1点は石灰岩、1点はグアノ（燐光石）であった。変成岩は、ミクロネシアではヤップ島にしか見られない安山岩起源の鉍物で、明らかにヤップ島からファイス島へ持ち込まれたと考えられる。近年まで、これらの石を火で熱し、薬草を入れた水の中に放り込んで蒸気を発生させ、それを吸引することで病気を治療を行うことが行われていた。このことは、これらの石が資源として土器や他の産物と共にファイス島へ持ち込まれたことを示している。

石灰岩及びグアノはおそらくファイス島産の物と考えられる。特に、グアノは、日本統治時代に掘り出され、日本に輸出された歴史がある。

(7) パラオ島から採取した粘土鉍物分析のは、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託して行われた。粘土に含まれる鉍物はX線解析および薄片による鉍物鑑定、粘土鉍物は蛍光X線分析によってそれぞれ分析が行われた。

ガッパン試料：石英の鉱物編と珪化凝灰岩を主体とし、微量の斜長石や白雲母の鉱物編も認められた。X線回析分析パターンでは、カオリナイトが支配的な粘土鉱物で、雲母鉱物および滑石が少量含まれている。

ゲルミド試料：石英、斜長石、単斜輝石などで構成され、カリ潮汐や斜方輝石、凝灰岩、玄武岩、多結晶石英、珪化岩など、多種の碎屑物も混在していた。X線回析からは、カオリナイトとスメクタイトが支配的である。

これらの結果、両分析試料には、粘土鉱物の組成に明らかに違いがあることが確認された。ガッパン試料はカオリナイトを主体とし、ゲルミド試料はカオリナイトとスメクタイトの2種類が主体であった。

カオリナイトとは、白磁を作成する原料として使われ、中国の六朝時代以降現代まで中国で盛んに使われ、日本でも江戸時代に伊万里でこれを使って磁器を作成していたことでもわかるように、粘土としては非常に質の高い物である。ヤップ島の非常に収縮率の高い粘度と比べると格段に質が高い。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計14件)

- ① Intoh, M. and M. Eda, A zooarchaeological and ethnographic study of frigatebird remains from Tobi Island, Palau in Micronesia. *People and Culture in Oceania*, 24: 67-79, 2008 査読有
- ② Lee, A.L., K. Katayama and M. Intoh, Craniometric comparisons of the female crania from Fais Island with the cranial series from the Pacific-Asia region. *Anthropological Science*, 116: 256-256, 2008 査読無
- ③ Intoh, M. and M. Eda, A zooarchaeological study of frigatebird remains from Tobi Island in Micronesia. *Anthropological Science*, 116: 249-249, 2008 査読無
- ④ 印東道子「ポリネシアとアメリカ大陸：先史時代の文化接触」『チャスキ(アンデス文明研究会会報)』38: 4-6, 2008 査読無
- ⑤ Intoh, M., Physical characteristics of the Taumako pottery. In, Leach, F. and Davidson, J. (eds.), *Archaeology on Taumako: A Polynesian Outlier in the Eastern Solomon Islands*, pp. 415-420, 2008 査読無
- ⑥ 印東道子「絶滅した巨大な鳥モア」青柳まち子編『ニュージーランドを知るための63章』pp. 49-53, 2008 査読無
- ⑦ 印東道子「海面上昇に直面する南の島々」『Re』159: 16-19, 2008 査読無
- ⑧ Intoh, M., Historical significance of the Southwest Islands of Palau. In, Clark, G., F. Leach and S. O'Corner (eds.), *Islands of Inquiry: Colonisation, Seafaring and the Archaeology of Maritime Landscapes*, pp. 325-338, 2008 査読有
- ⑨ Intoh, M. Ongoing archaeological research on Fais Island, Micronesia. *Asian Perspectives*, 47(1): 121-138, 2008 査読有
- ⑩ 印東道子「3000～4000年前のオセアニア」石垣市総務部市史編集課(編)『下田原期のくらし』石垣市史考古ビジュアル版第2巻 pp. 64-64, 2008 査読無
- ⑪ 印東道子「人の移動とネズミ」『月刊みんぱく』32(1): 6-7, 2008 査読無
- ⑫ 印東道子「海と島とカヌー」『月刊みんぱく』31(9): 3, 2008 査読無
- ⑬ 印東道子「生態資源の象徴化」内堀基光(編)『資源と人間』資源人類学第1巻 pp. 183-208, 2007 査読無
- ⑭ Intoh, M., Archaeological and ethnographic studies on natural resource utilization. *MINPAKU Anthropology Newsletter*, 24: 1-3, 2007 査読無

[学会発表] (計4件)

- ① 印東道子・江田真毅「フェイス島から出土した女性人骨の頭蓋骨形態—アジア・太平洋地域出土人骨群との比較より—」「第62回日本人類学会大会発表」2008年11月1～2日、愛知(愛知学院大学)
- ② 印東道子・江田真毅「ミクロネシア・トビ島(パラオ)出土のグンカンドリ骨について」「第62回日本人類学

会大会発表」2008年11月1～2日、
愛知（愛知学院大学）

- ③ 印東道子「先史時代の遠洋航海者達」国立民族学博物館開館30周年記念国際シンポジウム「オセアニアの偉大なる航海者達」2007年9月23日、大阪（国立民族学博物館）
- ④ Intoh, M. Historical ecology of Fais Island, Micronesia. The 21st Pacific Science Congress（第21回太平洋学術会議）2007年6月15日、那覇（沖縄コンベンションセンター）

〔図書〕（計3件）

- ① 印東道子（編）弘文堂『生態資源と象徴化』資源人類学 第7巻、2007、330pp.
- ② 内堀基光・菅原和孝・印東道子（編著）日本放送出版協会『資源人類学』、2007、208pp.
- ③ 国立民族学博物館（編）昭和堂『オセアニア：海の人類大移動』、2007、117pp.

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.minpaku.ac.jp/research/sr/19520719.html>

（国立民族学博物館ホームページ）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

印東 道子 (INTOH MICHIKO)

国立民族学博物館・民族社会研究部・教授
研究者番号：40203418

(2) 研究分担者

無し

(3) 連携研究者

無し